

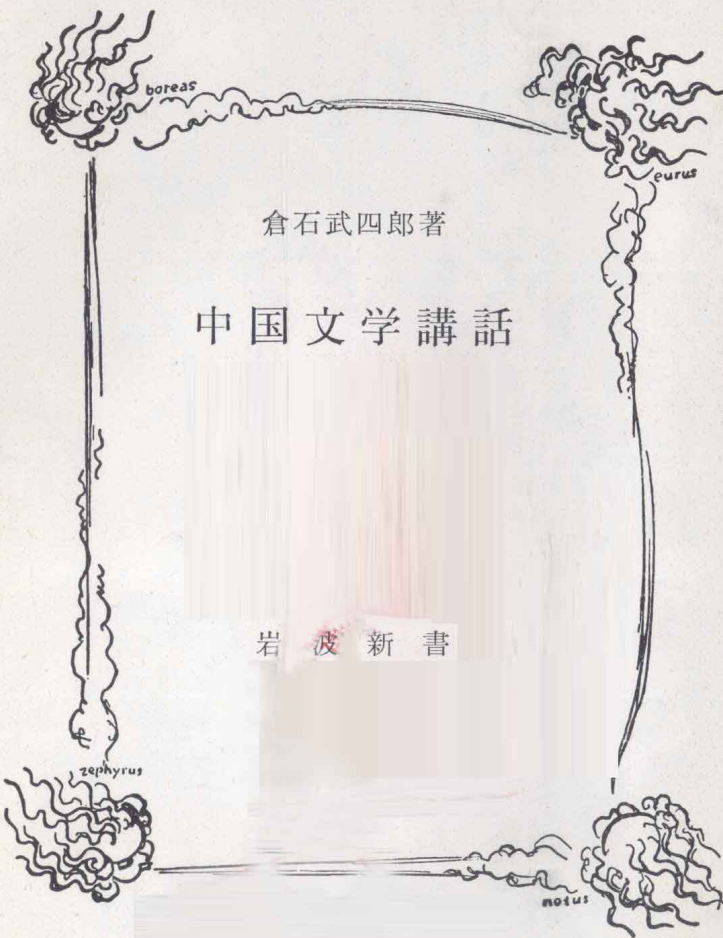
倉石武四郎著

中国文学講話



岩波新書

696



倉石武四郎著

中国文学講話

岩波新書

倉石武四郎

1897年新潟県高田市に生まれる

1921年東京大学文学部卒業

専攻—中国語学，中国文学

現在—東京大学名誉教授，日中学院長

著書—「支那語教育の理論と実際」

「ローマ字中国語初級」

「漢字の運命」(岩波新書)

「漢字からローマ字へ」

「岩波中国語辞典」

「とろ火」

訳書—「論語」「歴代詩選」

「タオ・チーの夏休日記」

中国文学講話

岩波新書(青版) 696

1968年11月20日 第1刷発行 ©



著 者 くら いし たけ し ろう
倉 石 武 四 郎

東京都千代田区神田一ツ橋 2—3

発行者 岩 波 雄 二 郎

東 京 都 青 梅 市 根 ヶ 布 385

印刷者 白 井 倉 之 助

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 岩 波 書 店
神田一ツ橋2—3

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・田中製本

はしがき

「家庭婦人のための中国語講座」が花やかであったころ、わたくしはその特別講義として「中国文学」のあらましをはなしたことがあります。毎月一回ずつ、すべて三十回、それは聴講有志の好意で、いちおう速記の形をとりました。その速記は、やがて雑誌『中国語』に連載され——紙面の都合でできるだけちぢめました、それでも二十六回にわたりました。それがいま岩波新書におさめられることになりましたので、その量に応じて、さらにちぢめてみました。特に魯迅以後のいわゆる新文学の部分は、いちおうすべて割愛しました。なぜかといいますと、新文学については、物があたらしいだけに、あたらしいたち場で、いろいろ紹介されていますが、魯迅以前の古典には、このようなみかたをしたものとぼしいようにおもうからです。わたくしがなぜ、このようなみかたをするようになったかは、「あとがき」にしるしておきました。

一九六八年九月

目次

はしがき

一	神話の世界	1
二	詩歌のはじめ	13
三	論理と話術	26
四	詩人屈原	38
五	人間のうた	48
六	怪をかたる	62
七	北朝と南朝	73
八	唐の詩人たち	86
九	奇をつたえる	100

十	説教のなかから……………	118
十一	詞のさかえ……………	132
十二	さかり場のかたりもの……………	143
十三	さかり場のうたいもの……………	153
十四	北方の劇……………	163
十五	南方の劇……………	172
十六	『三国志』と『水滸伝』……………	180
十七	『西遊記』と『金瓶梅』……………	188
十八	文芸批評のおこり……………	196
十九	『儒林外史』と『紅樓夢』……………	204
二十	文学革命と魯迅……………	212
あとがき……………		219

一 神話の世界

今から五十年ほどまえ、わたくしが第一高等学校に入学したばかりのこと、一年生の東洋史は箭内互^{やないわたる}先生でしたが、この先生が、東洋史のはじめに、堯・舜^{ぎょうしゆん}などという帝王たちは実在の人物ではなくて、後世のつくり話だと講義されました。そのとき、クラスのなかにいた中国の留学生が突然たちあがり、血相かえて、「先生！ 堯舜アリマス」といって抗議したという事件がありました。

元来、堯・舜・禹が実在の人物でないというのは白鳥庫吉先生の創見で、堯については『尚書』『堯典』のなかに天文を観測した記事があるからこれは「天」を意味し、おなじく『尚書』の「禹貢」では禹が地理をのべているから禹は「地」を意味する。そして堯典のなかで舜は人の道をおさめているから「人」を意味し、つまり堯と禹と舜で「天・地・人」の思想を擬人化したものだといわれ、それが箭内先生はじめ少壮学者に支持されていたわけです。しかし、この学説は当時の漢学者からみますと、「まことにけしからん」というわけで、その論争はそれ

から二十年にわたって学界をさわがしました。漢学者先生たちが堯・舜を抹殺されてはいつて論議されたのは、ちょうど中国の留學生が「先生！ 堯舜アリマス」といったのと、ほぼおなじ心理で、今からおもうと、ほほえましいとさえおもわれます。

堯と禹と舜が「天・地・人」の擬人化だということには、当時から漢学者でなくても相当に反論があり、もちろん、そうとはきめられません、これが伝説または神話的な人物だということについては、今日ほとんど、うたがうものがなくなりました。では、こうした伝説は一体どうしてできたのでしょうか。

この伝説でいちばん大切なところは、堯がなくなりますとき——それは人間の天子ですから後継者をきめなくてはなりません、堯はその地位を自分の子どもにわたさずに、舜という親孝行な、みんなのなかで人望のある人物にゆずった。これを「禪讓」といいます。その舜がなくなりまうとき、またその地位を自分の子にわたさずに、禹という、人民に大功のあった人物にゆずった。堯の子も舜の子も、かわいそうに不肖の子とされていきます。ところが、禹のばあいには、その子の啓は親におとらぬ賢人だったので、このときから世襲になった。世襲にする、しまいにはわるい天子ができる、それが桀けつです。そこで湯という人物があらわれ、その桀を放逐し、自分が天子になって殷の国をひらいた、これが「放」。その湯の子孫が世襲しているうちに、また紂ちゆうというわるい天子がでた。それを討伐したのが周の武王といわれた人物で、これを「伐」といいます。

この禪讓と放伐をならべてみますと、いかにも禪讓はうるわしい。また、りっぱな人物をえらぶわけですから、わるい人が天子にならない、こういう点では今の民主主義ともちかいかんがえかたで、まことに理想的です。これに反し放伐はなんといっても殺風景ですし、第一、天子があればすべての人はその臣下である、臣下が武器をとって君をおっぱらったり殺害したりする——現に武王が紂をやっつけたときなどは、みるも無惨なころしかたをしています、これはどうも感心できない、というのが人情の自然でしょう。

ですから、武王が紂の討伐に出発しようとしたとき、伯夷^{はくい}・叔斉^{しゆくせい}のふたりが武王の馬の鼻づらをおさえて、「天子にたいして弓をひくのは不忠ではないか、父上がなくなつて喪中だというのに戦争をするのは不孝ではないか」といっていさめた。武王がききいれないので、ふたりはとうとう周の米はいただかないといって、首陽という山にこもり、ワラビをとってたべていたのですが、栄養不良でなくなつた、という話が『史記』にでています。

この話もどこまで真実かわかりませんが、周の国としては、自分の国の王さまが、むかしその君であつた紂をせめほろぼして天下をうばつたというのは、あんまり気持のよいものではないはずです。だから、当時この戦争にたいして反対意見があつたということにもしたいし、またその戦争を是認するためには——これは今でもおなじことですが、あいてのことを極端にわるくいます。『孟子』にも、桀紂という人は氣の毒で、わるいことはなんでも桀紂のせいになされてしまふといっています。こうして、放伐そのものは手段としてのぞましくないが、やむ

をえない措置だというふうに弁解する。そうするといちばん理想的なのはなにかといえば、それは禪讓である。そこから堯・舜という人物をかんがえだす、というのが自然です。

また一方では、こういう説明もできます。天子は人民のために政治をする人ですから、徳がなくてはならない。その天子がもし徳をうしなったら、もうそれは天子じゃない、一匹夫にすぎない。それを討伐するのは決して天子に弓をひいたことにならない。これはおそろしくわかりきった説明ですが、ちゃんと『孟子』にかいてあります。ですから、むかし『孟子』という書物を日本にもってこようとすると、かならず暴風がおこって船がしずんだ。それは、こういう思想が日本にはいってはおこまるからだ、などともいわれました。しかし、『孟子』はちゃんと日本にはいっていますし、「四書」のひとつとして、日本の天皇の前で講義もされました。もっともこの匹夫紂の話のところは、さすがに天皇の前では講義できないということで、むかし御進講をつとめた清原家のテキストをみますと、そこのところだけ、御進講準備のかきこみが全然ないのです。

こういうことをかんがえますと、堯・舜の伝説は周の時代につくられて、周の開国にちなむ血なまぐさい事実をやわらげるといふ政治的作用があり、また政治には徳望がなくてはならない、徳望をうしなえば天子でもたちまち討伐されるものだといふ訓戒にもなったのでしょう。しかし、これが歴史の事実であったとはいえません。むしろそのころの人たちが過去のみにくい権力争奪にたいし、それなりの反省をもったものといえましょう。というわけで、中国最古

の文献であるはずの『尚書』の物語は、どうやらギリシア神話とはたいへん距離のあるものになってまいります。

ところで、このような物語が成長してくるまでには、もちろん、いろいろな素材が必要です。はるか古代から人民のあいだにいつたえられ、かたりつたえられた物語がたくさんあって、それを相当に利用しているにちがありません。

その素材になった物語として、いちばん神話的なのは、禹の物語です。禹は中国の洪水をふせぎとめることに大功があったといわれます。まったく洪水こそ中国人民にとって一大負担ですから、西洋のノアの洪水とはちがって、禹は人民に対する功労者として、あがめられているのです。この禹の父というのが鯀で、この人はいつも損な役にまわされ、天子から洪水をふせぐ工事をいつかつたのですが成功しない。そのあと、これも世襲で禹がひきうけました。ところが、それは大変なしごとですから一所懸命やっていて、三十歳になっても結婚するひまがない。そのうち南方へ視察にいった、ある女性をみそめます。しかし、いそがしいので、形式ばったことはなにもできず、いきなり結婚した。そしてわずか四日で新婚の妻をおいて、しごと場にでかけます。妻の方もさびしいので、夫のあとをおっていき、しごと場ちかくに世帯をもちました。そのしごと場は、ちょうど黄河が北から東へおおきく屈曲するところ、その山をぶちぬけば水がはやくながれる、というので禹ははりきっています。そのしごとのあいだは、おひるになりますと、禹が崖の上においてある太鼓をたたき、すると妻君が弁当をとどけにく

る、という約束になっていました。その山をぶちぬくのは、とても人間の力におえません。そこで禹は自分の体をひとひねりひねって、黒熊にかわり、口で岩をもちあげたり爪で土をほったりして、全力をあげて奮闘しています。ところが、ふとしたはずみに後脚で石ころをけとばし、それが太鼓にぶつかってドーンという音がした。その音をきいて妻君が弁当をもってきますと、夫の姿はなくて熊がはたらいています。細君はおどろいて弁当をほうりだし、「キャーッ」といってにげだしました。その声をきいて禹がしごとをやめ、あとからおいかけましたが、とっさのことで人間にかえるのをわすれ、熊の姿のままおいかけます。妻君はいよいよこわがってにげていきます。やっと嵩高山^{すうこう}まできて、妻君は息がきれ、そのまま石になってしまいました。禹がおいついて、石になった妻君にむかって、大声で「子どもをかえせ」とさげんだ。

——妻君は妊娠していたのです。そのとき石の北側がひらいて、中から子どもがうまれました。これが禹の子の啓で、啓というのは「ひらく」という意味だといえます。こうした物語ができたのも、禹という人物が中国人民の恩人であったからです。そしてこの辺から天子の世襲もはじまりますし、中国の歴史もはじまってくるのです。

さて、これまでの話は、『尚書』すなわち『書経』のことですが、つぎはこれとならぶ古典の『詩経』です。この『詩経』のなかには、国をひらいたりする人がうまれたときの奇蹟をうたった歌があります。そのひとつは、さきほどの湯という人の先祖の契^{けい}がうまれる前に、母親の簡狄^{かんてき}という人がツバメの卵をのんだという話。それから、周の先祖の夫人の姜嫄^{きやうげん}が郊禱とい

1 神話の世界

う神さまの社へ参詣したとき、おおきな足跡があった。それをみて姜嫄が自分の足をその上にのせてみた。しかし、足跡はおおきいので、女の足はその親指の中にはいつてしまった。そのあと姜嫄が妊娠して、うまれた子どもが棄——棄というのは、母親が氣持わるがって、冬のさむいときに氷のはった池にすてたのですが、鳥がきて翼であたためてくれるものだから凍死もしない。そこでまた街のにぎやかなところへすてたのですが、牛や羊もよけてとおり、交通事故にもあわない、それがそだって稷しよくといわれた。というのは、農業をおしえて人民に大功をほどこしたからです。

例の「堯典」などでは、この稷と契とが堯・舜の朝廷につとめていたことになっていますが、さてその子孫が一方は殷になり一方は周になるというのでは、話がうますぎて、こしらえものだということをみずから白状しているようなものです。ともかく、天子になるような人については、かならず普通とちがった、なにかがなくてはならない、というかんがえかたがこのような物語を発生させたにちがいありません。ついでながら、足跡をふんで妊娠するという話は中国だけでなく、ベルギーあたりにもあるそうです。

神話というのは、人間というちいさな存在が、この悠久な天地のあいだにすておかれて、そのわびしさ、さびしさから、自分のうまれ故郷をなつかしむ歌だ、といったらオーバーかもしれないが、とかく天地自然や人間のおこりなどにふれたがります。たとえば、天と地ははじめ混沌としてひとつであったのが、だんだん上ずみと下へたまったおりにわかれ、こうして天

地ができたといったかんがえは、ギリシアにもあれば中国にもあります。『日本書紀』にもありますが、これは中国の模倣です。とりわけ中国の特長としては、中国の地勢は西北がたかく東南がひくくなっており、川はすべて西北から東南へながれる、なぜ山は西北にそびえ、川は東南にそぐのだろうか。この説明が有名な不周山の神話です。

インドには「地水火風」の四つから宇宙ができたという説があるそうですが、中国でも「木火土金水」を五行といって、宇宙生成の元素のようにかんがえています。そのうち水の神さまが共工で、火の神さまが祝融^{しゆくゆう}、この二人があるとき大げんかをしました。大戦争のすえ、火がかって水がやぶれ、さすがの共工もこのうえいきていく希望もないというので、中国の西北にある不周山めがけて自分の頭をうちつけました。この不周山というのが天をささえるための柱だったのですが、それが共工の一撃でたおれてしまい、天の半分がくずれておおきな穴があき、こうして中国はかしいでしまった。それをみた女媧^{じょか}という神さまが五色の石をねって、天のほころびたところをくっつけ、それからおおきな亀の足をきって、天の四本柱にした。この亀というのが、むかしは大変たくさんいたらしく、例の禹の父親の鯀が洪水の工事をして失敗したときにも、どこからかでてきて、てつだった、というよりは亀のおかげで失敗したらしい話もあります。

それから太陽も人間生活にとって、とても大切なものですから、その太陽が毎日毎日、天上を旅行する、車にのってあるく、という神話は外国にもたくさんありますが、中国でも東のか

1 神話の世界

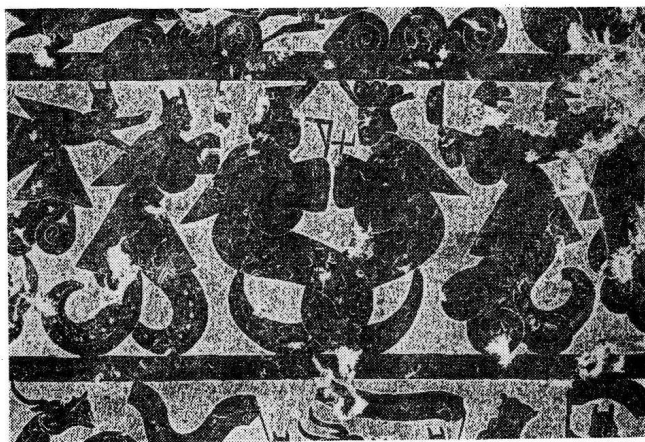
た扶桑から出発するといわれ、そのために日本のことを扶桑というようになりました。太陽は毎日あらわれますから、その数はひとつでないというのが自然なかんがえかたで、中国にも太陽が十個いっぺんにあらわれた、という神話があります。はじめは十個の太陽が毎日一個ずつ交替に出動していたのですが、それはめんどうだ、十人いっしょにでかけよう、といって一度に十個の太陽が出発した。さあ人間はあつくてたまらない。そこで羿げという豪傑をよんできて、矢を十本あたえて太陽を一つずつ射させた。羿の矢が太陽に命中すると、火の玉が爆裂し、金の羽がおちる。その羽は太陽の中にすむ三本足のカラスであった。もっとも羿があんまりみごとに射おとすので、十本で太陽を全部おとしてしまうかもしれない、といって一本そっとぬいておいたので、今の太陽だけがのこったのだということです。

この羿という人は、月についても問題になっています。羿の妻君はもと天上の人だったので、天にかえりたいとかんがえていました。それには西王母のところにある不老不死の薬がいる。そこで羿が西王母にたのみにいって、それをもらってききました。その薬は、夫婦二人でのむと不老不死になるが、一人でのむと天にのぼれるという。それを妻君が一人でのんで、フワリフワリと天にのぼっていく。そしてとうとう月に軟着陸しました。ところが、ふと気がつくと、自分の体がちぢまっていき、皮膚にイボができてきた。こうして月のなかにヒキガエルがいることになったのです。またほかに月のなかのウサギの話もあります。

こうした天上の話のほかに、人間の由来をかたるものもあります。たとえば、広西省にいる

倭よという少数民族がつたえた伝説に、こんな話があります。ある日、たいへんな大雨がふって、雷がひどくなってきたので、父親と二人の子ども——男の子と女の子——が家の中にかくれていました。その父親は前から雷をつかまえてやろうとおもって、鉄の籠かごを用意していましたので、雷が空からとびこんできたのをまちかまえ、うまくつかまえて籠かごのなかへいれてしまいました。翌日、父親は香料をかいに町へでました。雷をころして塩づけにするつもりですが、それには香料がいるのです。その留守中、子どもに雷の番をさせ、水は一滴ものましてはならないと、かたくりいつけておきました。ところが、雷があんまりあわれな声で水をくれというものですから、ほんのちょっとブラシにつけて雷の口へたらしてやりました。すると雷はたちまち鉄の籠かごをやぶってとびだしました。そのとき口のなから歯を一本ぬいて二人の子どもにわたし、「いそいでこれを地面にうめなさい」といったなり、天へかえってしまいました。父親は町からかえってこの話をきき、これは大変なことになるとおもい、いそいで鉄の舟をこしらえて準備をします。子どもたちが雷の歯を地面にうめますと、芽がでて花がさき、翌朝はおおきな瓢箪ひょうたんがみのりました。二人が鋸のこぎりをひいて瓢箪ひょうたんをわりますと、なかに歯がギッシリはえています。その歯をぬきとると、ちょうど二人のりの船のようになりました。そのとき、たいへんな嵐がおこり、大洪水になりましたので、父親は鉄の舟にのり、子どもたちは瓢箪ひょうたんのなかにかくれました。それはたいへんな洪水で、水はとうとう空にとどきました。そこで父親は鉄の舟を天の宮殿の門につけました。天の神さまはおどろいて、水の神さまにいいつけ、すぐ水をひ

1 神話の世界



伏羲兄妹の図(漢の武氏祠後石室の石刻)

かせます。すると鉄の舟はいっぺんに地面におちてくれましたが、瓢箪の方は弾力があるものですから、子ども二人はたすかった——この世に人間が二人のこったわけです。この二人を伏羲の兄、伏羲の妹といいます。伏羲とは瓢箪のことだそうです。

その二人がだんだん大人になりますと、ほかに相手がないので、兄が妹と結婚しようという。妹は反対だったのですが、とうとうことわりきれず、妹が「その大木のまわりをにげてまわるから、もし兄さんがわたしをつかまえたら結婚しよう」という約束をしました。ところが、妹は足がはやくてつかまらない。しまいに兄の方が計略をかながえ、はげしくおいかけておいて、急に逆まわりにはしりました。それで妹がつかまって、とうとう夫婦になりました。そのうち妹が肉のかたまりをうみおとしましたので、